

社会の秩序と進歩のための教養

遠山 堯

Culture for the Order and Progress of Society

TOHYAMA Takashi

Abstract : Unlimited liberty, rights and equality cause disorder and stagnation in all fields such as politics, economy, education and so forth in false liberal and democratic societies. Liberty, rights and equality are limited by considerations of order and progress in truly liberal and democratic societies. To understand the difference between these two kinds of ideals is the role of culture, which is studied from the fundamental viewpoints of humanity and society. Consideration of the fundamentals of humanity and society helps a person to achieve progress and growth. On that account, culture from the fundamentals of humanity and society gives society order and progress.

日本の社会は、政治、経済、教育等いずれの分野においても、混迷の只中にある。日本は、湾岸戦争の際日本からの金銭的支援に対し欧米諸国からの謝意はなく、多額の拠出金にもかかわらず国連の常任理事国に推薦されず、国際的に孤立状態である。

社会は、国内の混迷と国際的孤立という八方塞の状態に対し、思いつきで整合性のない方策が次ぎから次ぎへと出され、ますます混迷の度合いを深める。社会が八方塞から抜け出すための方策は、人々が視野を広く考えを深くして、社会を構成する人間の原点と社会の原点を追求し、社会にけじめをつけ筋を通すことができる、社会的に価値のある普遍的な本来の教養を身につけることから始めることである。

普遍的な人間と社会の原点を追求した教養は、普遍的な自由、権利および平等による自由主義、民主主義に適っていて、社会の秩序と進歩に適っている。視野が狭く考えが浅く自己中心的な人は、社会のための本来普遍的でなければならない自由、権利および平等を、社会は念頭になく普遍性を欠いた人によって異なる自己中心的自由、権利および平等と錯覚する。錯覚された普遍性が欠落した自己中心的自由、権利および平等による自由主義、民主主義は、社会にけじめがなく筋を通すことができず、かえって社会を混迷の果てに停滞させる。こういう事態を避けるために、個人と

社会の間にけじめをつけるためのダブルスタンダードが必要になる。自由、権利、平等に加えて教養は、自由主義、民主主義社会の秩序と進歩のために不可欠である。

日本が国際的孤立状態から抜け出すためになすべきことは、日本人が民族によらない普遍的な教養を身につけ、欧米人と対等になることである。

普遍的な人間と社会の原点から乖離した方策は、方策に関わることを羅列し総花的になり考えの出発点が明確さを欠き、人々の理解が得られず後につづく議論が出ず、世論にならない。

人間の原点と思考

社会が八方塞から抜け出すための第一歩は、常道にしたがって人間と社会の原点にかえることである。社会の原点を追求しようとする人は、社会を構成する人間の原点の追求から始めなければならない。人間の原点を追求しようとする人は、社会を構成するという観点から人間の欲望、情および思考力に注目し、周囲の人を観察すればよい。

欲望しか眼中にない人は、利益を独占すべく周囲の人に対し排他的になり、具体的、表面的な欲望の対象にのみ注目し、自ら視野を狭くして普遍的、内面的な

ことを見落とし、欲望を追求するあまり前後の見境がつかなくなり、けじめをつけることを知らない。大抵の欲望は金銭で満たすことができるから、欲望しか眼中にない人は金銭が最高の価値であると思ひこむ。

情は、情に働きかける対象に依存するという点で、受身である。受身である人は情に働きかける対象の表面的なことにしか注目しない。表面的な対象は、受身である人の主観に適しているときその人に直観的に受け入れられるが、主観に適していないとき直観的に受け入れられない。情が際立った人は、自分の直観的な主観が中心であり、自己中心的である。社会を進歩させるような新しい考えは、受身である人の主観に合わず、その人に受け入れられない。情は、個人の範囲では人間関係を円滑にするために欠かせないが、人を自己中心的にさせ自他の間にけじめをつけさせず、内面が見えず普遍性を欠くため社会の規範とはなりえない。

人間の欲望と情は、太古の昔から変化がない、すなわち進歩がない。

内面的な思考は、観察、整理、分類、洞察へと進められ、思考の対象の原点にいたる。原点を追求するための思考は、与えられた問題を解決するための思考よりも、高度な思考である。原点を追求せずに進める表面的な思考は、迷路に入りこんでどこへ向かって考えが進むかわからず、無意味であるだけでなく失敗の原因となる。原点からの思考は、表面のみならず内面をも見通すことができる普遍性があり、際限がなく広くて深い内面で、けじめをつけることを教える。

欲望、情および思考は、それぞれが単独で表れることもあるし、たがいに関連して表れることもある。たとえば、欲望を満足させるためには思考が必要である。欲望の対象の原点を追求してから進める思考は、誰も考えつかない考えにたどりつけば、自分の欲望を満足させ、社会の秩序を乱すことなく社会を進歩させることができる。低度な思考である思いつきの浅知恵で手っ取り早く欲望を満たすならば、ある人の欲望の満足が周囲の人にしわよせされる。思いつきの浅知恵による欲望の満足は、社会全体として進歩がないだけでなく、周囲の人がしわよせされた結果社会の秩序を乱すことが多い。

情と情が通じ合った直観的な共感によって、連帯感が得られることがある。しかし、思考を伴わない共感による連帯感は、普遍的な根拠を欠いていて、欲望に対して全く無力であり簡単に壊れる。原点からの思考と思考をつき合わせ互いに納得した共感は、原点とい

う普遍的な根拠を持っていて、欲望や情に惑わされない強い連帯感になる。

思考力不足で欲望と情が際立った人は、欲望で排他的であり情で自己中心的で視野が狭い。視野が狭い人が多い社会は、欲望や情で対立の果てに、闊のような小社会に分裂する。思考力不足の人で構成される小社会は、論理はなく義理、人情がまかり通り、進歩はなく習慣、前例や既得権がまかり通る。小社会の寄せ集めである社会は小社会と同様で論理と進歩がない。

人間は、長所、短所を併せ持った未完成な存在である。人によって異なる長所、短所を合わせ持った人間は本来千差万別な存在である。思考力不足で小社会に埋没した人は、内面的で大事なことと、表面的で些細なことの区別がつけられず、些細なことをとりあげて騒ぐ。小社会に分裂した社会は、千差万別な人たちの間で些細なことで対立して混乱し、いざこざが絶えない。

論理である言語を使える人間は誰でも論理的思考の潜在能力がある。論理を伝えようとする人も伝えられる人も、論理的思考ができる人でなければ、論理は伝わらない。情とは次元が異なる論理的思考の結果は、情が際立った相手に受け入れられず、相手に伝わらない。そのため、意見の対立がいつも話し合いで解決できるとはかぎらない。社会は論理的思考の結果が伝わる人と伝わらない人に分化する。

多くの人が気にする人間の頭のよさは、記憶力、頭の回転の速さおよび思考力である。記憶は思考のための予備知識を収納することである。記憶すべきことは先人が考えたかまたは行なった過去の事実である。思考を伴わない記憶は過去にとどまったままで進歩がない。頭の回転の速さは原点からの思考を省略し同じところを回転するだけで進歩がない。結局、原点からの思考だけが人間を進歩、成長させる。しかし、記憶力に優れ頭の回転の速い人は、とりあえず実務だけは遂行でき、表面的に自立できているかのごとく見える。

人間にとって最も大事なこと、すなわち人間の原点は、未完成な人間を進歩、成長させる内面的な思考である。一人の考えが進めば、他の人がその進んだ考えをヒントにしてさらに考えを進める。原点からの思考だけが、複数の人間の間を生ずる相乗効果で思考を進展させ、社会を進歩、発展させることができる。

社会の原点から教養へ

人間が社会生活をするためには、ルールという拘束

が必要である。社会のルールは、千差万別なすべての人が納得できる、普遍的な人間と社会の原点を追求したうえで、普遍的なルールでなければならない。

大きな潜在的力を持っている社会は、社会を構成する視野が広く考えが深い人々の知恵と判断と納得で、秩序を乱すことなく進歩、発展するところである。これが本来の社会の原点である。

視野を広くするときには注意しなければならないことは、自分、自分が所属する組織、自分を含めた社会へと考えを進めると、どこまで考えを進めても自分中心に考えることである。視野を広くすることは、些細なことや損得にとらわれず、世界的規模の社会全体から社会の原点を追求し、社会の原点を把握してから現実の社会へと、考えを進めることである。いくらでも出てくる普遍性を欠いた些細なことや損得にとらわれる人は、いつまでも社会の全体像はつかめず、普遍的な社会の原点が追求できない。

人間と社会の原点を追求して次ぎになすべきことは、分業化して複雑になった社会が混乱しないよう、社会にけじめをつけ筋を通すことができる、すべての分野の人に共通する社会的に価値のある普遍的な教養を探ることである。そのためには、歴史を含めて現実の社会の概観が必要である。成功に終わった結果よりも失敗に終わった結果の方が多い歴史的事実は、そのまま鵜呑みにしてはならず、人間と社会の原点の追求という過程を経なければ現在に生かされない。

分業化して複雑になった社会は、社会をまとめる機構である政治を必要とする。社会は、長所、短所を併せ持った未完成な存在である少数の人間が社会をとりしきっても、未完成のままでは進歩がない。国家がすべてをとりしきる政治は、単純で変化がない農業社会では支障を表面化させることはなかったが、複雑で早く大きく変化する工業社会には適わない政治である。社会は少数の人では不可能なことを可能にできる大きな潜在的力を持つ。古今東西にわたり、大きな潜在的力を持った国家的規模の社会を少数の人で取り仕切る試みは、取り仕切る側と取り仕切られる側とが衝突するか、社会が停滞するかまたは暴走するかのいずれかであり、強大な権力を行使しても失敗に終わる。すなわち、視野が広く考えが深い大勢の人の知恵と判断と納得は権力に勝る力である。

大きな潜在的力を持った社会の秩序と進歩のためには、大勢の人の知恵と判断と納得が必要である。民主主義は、大勢の人の知恵と判断を政治に結集させ、人々の納得のもとに、社会に秩序と進歩をもたらすた

めの統治の方法である。大きな潜在的力を持った社会は、大勢の人の知恵と判断と納得が得られなければ、混乱するだけで秩序がなく、大きな慣性の力で進歩に抵抗する。

思考力不足で小社会に分裂した社会では、分裂した意見を持った多数の政党が乱立し離合集散をくりかえす。小社会に分裂した社会での意見の相違は、欲望か情の違い程度の相違であって、大きな相違はない。しかし、意見の対立が、人間と社会の原点がわからない人たちの小さな相違をめぐって、いつまでもつづく。思考力不足の人は、論理的思考とは次元が異なる欲望や情で具体的な各論だけに注目し、議論を混乱させる。普遍性を欠く欲望や情は補足にしかならず普遍的な論理に先行してはならない。小社会に分裂した社会は、大勢の人の知恵と判断を結集できず、人々の納得が得られず秩序と進歩がなく、民主主義社会の対極にある、本来の社会と異なった社会である。

単純でほとんど変化がない農業社会では、人間と社会の原点が追求できていない社会のルールによって、支障が表面化することはなかった。思考で最も早く進歩する科学技術を基礎とする工業は、人々の思考で進歩して経済を先導し、社会を豊かにする一方複雑にし早く大きく変化させる。複雑で早く大きく変化する工業社会のルールは、迷路に入りこまないため、社会の変化によらない普遍的な人間と社会の原点を追求したうえで思考で進歩しなければ、思考による工業の進歩に取り残される。改革を怠って取り残されたルールは、進歩した工業社会から乖離し、古い考えと新しい考えを混在させ、社会をひいては社会の一部である経済を混迷させる。古い考えと新しい考えの混在は、けじめを欠き無秩序状態と同じことである。工業社会のルールは、人間と社会の原点が追求できていない、社会の進歩と進歩のための改革は念頭にない、情と情の共感による連帯感を基とした、農業社会のルールの延長線上で考えてはならない。

思考で先導された経済の発展が最も早い。人心は経済の発展でひとまず安定する。しかし、経済の発展は、社会の発展した部分と発展しなかった部分の間で格差を生み、社会に歪を残す。立法は、経済の発展によって生じた社会の歪を緩和し、社会の秩序を回復させることを目的として、先走らずに経済の後からついて行けばよい。行政は立法が決めたことを実施すればよい。

人間は、論理的な存在であるが、人間と社会の原点が追求できたとしても、社会の将来を見通すことは難

しい。人々が人間と社会の原点から思考を重ねて社会を進歩させる。思考は、思考を重ねてみなければ、どの方向へ進展するか見通せない。大勢の千差万別な人の思考はなおのことどこへ向かって進むかわからない。人間は長所、短所を併せ持った未完成で能力に限界がある存在である。人間の能力の限界が念頭にない人は、先走ったとき社会の予想外の展開によって大きな失敗をする。

複雑で早く大きく変化する工業社会の立法は、単純で変化がない農業社会の立法の延長線上にあってはならず、大勢の人の知恵と判断と納得を要する普遍的な社会のルールに関わる立法と実務に関わる立法に、分業化されなければならない。

予算を配分する行政は、思考力不足で金銭が最高の価値である人が多い社会では、主導権を握る。主導権を握った行政が規則や規制で権力を強化することは、社会の分業化に逆行し、社会の秩序と進歩に必要な大勢の人の知恵と判断と納得は得られず、社会を混乱させ停滞させる。複雑で早く大きく変化する工業社会の行政は、単純で変化がない農業社会の行政の延長線上にあってはならず、普遍的な社会のルールに関わる分野と実務の分野に分業化されなければならない。普遍的な社会のルールは高度な思考を要する。高度な思考を要しない実務は分業化で能率が上がる。しかし、けじめを欠いた分業化は自己中心的な人たちの主導権争いや癒着で混乱し能率が上がらない。異なった範疇の分野の混在は、けじめを欠いた形だけの分業化で未発達なままの行政を、ひいては社会を混迷させる。

教育の目標は、社会の一員として分業化した社会の一部を受け持つための、実務能力を生徒に身につけさせるだけでなく、視野を広く考えを深くして人間と社会の原点を追求し、そこから社会の秩序と進歩について考えられる能力である、社会的に価値のある普遍的な本来の教養を生徒に身につけさせることである。普遍性を欠いた、知識を誇示するような自己満足のための自己中心的教養は、社会にとってはどうでもよいことであり、学校で教育する必要はなく自分で身につければよい。複雑で早く大きく変化する工業社会の教育も、単純で変化がない農業社会の教育の延長線上にあってはならず、生徒をより視野を広く考えを深くさせ、教養を身につけさせ、人間として進歩、成長させる教育でなければならない。

以上の概観のごとく、社会の主役は、教養を身につける思考であり、社会にとって副次的な金銭や社会的地位ではない。金銭や社会的地位のような表面的な対

象は、多くの人に注目の的にされ争いの対象とされやすく、社会の秩序と進歩の妨げとなることが多く、最高の価値ではあり得ない。すべての分野の人に共通する内面的な教養は、普遍的な人間と社会の原点を追求した、社会に秩序と進歩をもたらす論理であり、分業化して複雑になった社会にけじめをつけ筋を通すことができる、最高の価値である。

自由主義、民主主義と教養

人間は、永い歴史の間に大きな犠牲を払い、試行錯誤を繰返しながら、社会を統治する方法を模索してきた。複雑で早く大きく変化する工業社会にとって適切な統治の方法は、広い視野深い考えで普遍的な人間と社会の原点を追求した教養に適っている、工業の進歩に伴うよう社会を進歩させることができる、自由主義、民主主義である。混迷した自由主義、民主主義社会は、実務のための表面的な法律だけでは社会の秩序が維持できず、複雑な社会にけじめをつけ筋を通す、社会全体のための内面的な教養が不可欠であることを示している。法律に反しないことがすべて許されとは限らない。

自由主義のねらいは、思考の妨げになる先入観、習慣、前例のような拘束から人々を解放し、思考で個人をひいては社会を進歩させ、進歩のために不可欠な新陳代謝である改革をさせ、社会にけじめをつけさせることである。思考力は、他から強いられて備わるのではなく、本人の自由な意思によってのみ備わる。他から強いられた思考は、人を思いつきの浅知恵に向かわせ、かえって社会の秩序と進歩の妨げとなる。

民主主義のねらいは、より多くの人の思考力を結集させるため、すべての人にあらかじめ権利と平等を認め、できるだけ多くの人を政治に参加させることである。人間と社会の原点を追求した普遍的な社会のルールに関わる高度な思考には時間を要するから、一人の考えはなかなか進まない。他の人の考えがヒントになれば、一人の考えは進む。社会は大勢の人がヒントを出し合い大勢の人が考えれば進歩する。人々が知恵を結集させ世論を進歩させ政治を先導する。これができるだけ大勢の人を政治に参加させる民主主義である。小社会に分裂した社会は、小社会に埋没している少数の人々の思考は進まず、思考が進まない小社会の寄せ集めである社会全体として知恵を結集できず、政治が人々に先行する社会に逆転する。

普遍的な自由、権利および平等は、社会を構成する

個人に与えられてはいるが、社会の秩序と進歩、および進歩のための改革を念頭においた社会に重点を置いた考えである。

人間は、本来人によって異なる長所、短所を併せ持った千差万別な存在であり、人間と社会の原点を追求してから考えを進め、一層千差万別になる。人間と社会の原点を追求した、考えの出発点と同じである千差万別は、混乱のない千差万別である。人間と社会の原点を追求し、社会にけじめをつけ筋を通す教養を身につけた千差万別な人々が、普遍的な自由、権利および平等で思考するならば、社会は秩序を乱すことなく進歩する。

社会を統治すべき自由主義、民主主義のための自由、権利および平等が、社会の秩序と進歩は念頭になく、義務と普遍性を欠いた、千差万別な人の自己中心の野放図な自由、権利および平等と勘違いされるならば、社会の混迷と停滞は必然の成り行きである。

自由は、教養を身につけるために必要であり、教養を身につけてから、社会の秩序と進歩に向けさらに思考を進めるために必要である。自由主義社会の人々は教養を身につけられるだけの思考力が求められる。

自由主義、民主主義社会の社会人は、選挙に際して等しく一票の権利が与えられている。自由主義、民主主義社会の社会人は、当然教養を身につけているという前提での、等しい一票の権利である。等しい一票の権利を含め権利には、教養を身につけるという義務が、果たされていなければならない。

民主主義社会における平等は、教養を身につけるために必要な思考のための機会均等としての平等でなければならない。民主主義による政治は多数決で決議されるから、教養、少なくとも教養を理解できる程度の教養は、民主主義国家の国民的課題であって、少数の特別な人の課題ではない。

以上のことが理解できず教養が身につけていない人は、普遍性を欠いた自己中心的自由、権利および平等によって、社会のいたるところで混乱を引き起こす。

言論の自由は、社会に秩序と進歩をもたらす教養を出発点とした意見であってこそその言論の自由であって、教養が身につけていない人が思いつきを言う自由ではない。情が際立った人の意見は、内面が見えず表面だけを見た思いつきであり、見落としがある。人間と社会の原点から乖離した、理想の社会を希求するような一見もっともらしい意見は、教養が身につけていない人の情に訴えるが、教養を身につけた人の納得は得られず、普遍性を欠き多くの人を惑わせ社会を混乱

させる。

社会環境はすべての人に快適であるとはかぎらない。人間の苦悩は対人関係を含め社会環境から生ずることが多い。宗教は人間の苦悩を和らげ個人の幸福を求めることを一つの目標とする。したがって、宗教は人間と社会の原点を追求した哲学でなければならない。人間と社会の原点から乖離した、単なる願望にすぎない観念的倫理は、どこへ向かって考えが進むかわからない。最悪の場合、閉鎖的、狂信的な教団が、観念的倫理に浅知恵に浅知恵を重ねた挙句途方もない結論に至り、その結論を実行して社会を混乱させる。信教の自由は、人間と社会の原点を追求した、教養を出発点とする教養を持った宗教のための自由である。

人々が、人間と社会の原点を追求し、人間と社会の原点から思考を重ねて、学問を進歩させる。したがって、学問の進歩の成果は社会に還元されなければならない。学問の自由は、人間と社会の原点を追求した教養を出発点とし、進歩の成果を社会に還元できる学問のための自由である。

基本的人権は、強大な権力を持つ国家といえどもこれを侵すことはできない、すなわち国家と個人の間に関わりつけ、大勢の人の知恵と判断と納得のもとに社会を進歩させるために認められる。権利は思考のための自由と平等を妨げないようけじめをつけることである。どちらか一方の権利が他方の権利よりも強くなれば、強くなった権利は、けじめをつけることにならず、他方の自由と平等を圧迫し思考を停止させ、社会を混乱、停滞させる。けじめをつけるための権利は、分業化して秩序を乱すことなく進歩する社会にとって不可欠である。

巷間よく主張される結果としての平等は、結果にいたるまでの過程を問わない平等であり、人を手っ取り早い思いつきの浅知恵に向かわせ、思考による進歩を妨げ、社会に混乱と停滞を招く平等となる。

社会全体に関わる普遍的ルールのための自由、権利および平等は、原点から思考するための自由、権利および平等であって、原点からの思考とは次元が異なる欲望、情のための自由、権利および平等ではない。個人のための自由は、周囲に迷惑をかけなければ認められるが、社会の普遍的なルールのための自由としては認められない。人間の原点は社会の原点とは異なる。したがって、個人のための自由は社会の普遍的なルールのための自由とは異なる。思考は思考を進めてみなければどの方向に向かって進むかわからない。したがって、自由は思考のための自由であって、思考の結果

についての自由ではない。思考の結果は、社会の秩序と進歩に適っているかどうかで、改めて判断されなければならない。

人間と社会の原点を追求してから進めた思考の結果が、誤って直観的、自己中心的に解釈されるならば、誤った解釈は、人間と社会の原点から乖離した、社会を混乱させ停滞させる解釈となり、けじめを欠いた無法状態と同然の社会にする。教養を身につけた人だけが、自由、権利および平等を主張できる。

誰とも接触せず一人で生きる人間は、自分の生命を維持するだけで精一杯であり、生活に余裕はなく進歩は望めない。役割を分担しそれぞれの分野で能力を発揮し社会生活を営む人間は、生活に余裕ができ、一人では不可能なことを可能にし進歩する。人間は社会の中で生きてこそ人間として生きられる。したがって、社会の普遍的なルールのための自由、権利および平等は、教養を身につけた人であっても、個人のための自由、権利および平等に優先する。これが、個々の人間と社会の間にけじめをつけるためのダブルスタンダードであり、社会の秩序と進歩のために不可欠である。

全 人 教 育

思考力が備わるか否かは義務教育終了まででほとんど決まる。論理である言語を使えることは論理的思考ができることである。幼児が言葉を話せるようになったときに幼児に思考力を培わせるチャンスである。したがって、思考力を培わせる教育は親が半分以上の責任を負わなければならない。内面的である思考は、表面にあらわれやすい欲望や情のように、周囲の人を真似て自然に備わることは期待できない。家庭教育と義務教育の思考力を引き出す教育は、この時期を逸すれば取り返しがつかず、子供の一生を左右するほど大事である。人間は、まず幼年期に人間として最も大事な思考力を備え、次ぎに思春期に身体的に成長する。人間の原点である思考力が備わらず身体的に成長した人間は、けじめのための自己抑制ができず、反社会的な行動をとることがあり、一生その可能性を引きずる。

教育の目標の一つは、子供たちに自由主義、民主主義社会における社会生活の準備をさせること、すなわち、子供たちに思考力を培わせ教養を身につけさせることである。したがって、教育の目標は、子供たちに実務能力を習得させ教養を身につけさせること、すなわち全人教育である。思考に長い時間を要する教養を身につけさせる教育は、家庭教育に始まり、社会でも

継続されなければならない、すなわち学校だけの教育ではない。

生徒は教養を身につけるためには自ら考えなくてはならない。そのために教員がなすべきことは、生徒に結論を教えることでなく、基礎知識の説明の後興味や疑問を生徒から引き出し、ヒントと時間を与え生徒に考えるよう仕向けることである。生徒は、推理の過程を経ずに結論を教えられると、推理する楽しさを奪われ授業がつまらなくなり、そこから先へ考えを進めようとしなくなる。生徒は、些細なことでも自分で考えて結論を出した嬉しさを経験すれば、つぎへ推理を進めようとする。思考力は、教員が教えて備わるものでなく、生徒自身が自発的に思考に取り組んで備わるものである。

あらゆる分野のことを憶えなければならない詰め込み教育は、複雑で早く大きく変化する工業社会では、時間ばかり要して非能率的な教育である。能率的な教育は、各分野で必要なだけの基礎知識を生徒に憶えさせ、あらゆる分野で威力を発揮できる思考力で、生徒を自ら進歩、成長させる教育である。

思考と記憶の結果を合計し、総点の高い方から合格させる入試の方法は、一考を要する。この方法が入試に採用されれば、受験生は手っ取り早い記憶に取り組み時間を要する思考をおろそかにする。思考は記憶とは異質である。異質なことの加算は無意味である。思考は、複数の人間の間で相乗効果で進み、社会を進歩、発展させることができる。記憶は、複数の人間の間で相乗効果が現れず、社会を進歩、発展させることはできない。

全人教育を目標とする教育は個々の科目にも指針を与える。社会は複雑であり具体的な対象がないから、社会科を教えることは難しい。そのため、考えることはいくらかもあるにもかかわらず、社会科は安易に暗記科目にされている。生徒は、社会科の試験を暗記で乗り切ってしまうれば目的を達したことになり、後は社会について何も考えない。社会科を暗記科目にすることは、社会科をひいては社会を思考の対象から外し、教養を身につけさせる教育に反することである。

工業に関わる人の思考の結果は工業社会を複雑にし早く大きく変化させる。工業社会のルールは、人間と社会の原点を追求したうえで思考で進歩しなければ、思考による工業の進歩に取り残される。対象が複雑であるが具体的でない社会のルールに関わる社会科学は、対象が具体的な自然科学以上に進歩に不可欠な思考を必要とし、巷間伝えられるような暗記科目であっ

てはならない。

言語は思考を進めるための手段であり思考の結果を伝えるための手段である。国語教育は、教養を念頭に置いて、文章から他人の思考の結果を読み取ること、自分の思考の結果を他人に伝えることに重点を置くほうがよい。文学作品から情を読み取る教育は、必要ならば思考の結果の伝達に習熟してから取り組めばよい。教養を念頭に置いた教育はすべての人に必要である。文学作品から情を読み取る教育はすべての人に必要ではない。

数学、物理学の教育は、公式を与え計算の結果である数字を求める教育に終始している。数字を求める教育は、数字が得られたら目的を達したと思ひこみ、生徒はそこから先へ考えを進めようとせず、原点を理解するにいたらない。計算は数学、物理学にとって目的ではなく手段にすぎない。進歩のためには、どの分野の学問であれ、まず原点を追求するという手順を踏まなければならない。

学問への取り組み方は分野によらず同じである。すべての学問は、思考の対象の原点を追求することから始まり、その原点から人々の思考で進歩する。以上のことはかつての大学の教養部における一般教育で習得されるべきことであった。しかし、学問の哲学とも言える一般教育は、その意義が追求されることなく目標が理解されないまま、一部の大学で廃止に追い込まれた。

教育に関わる人にとって必須の条件は、偏った先入観にとらわれず視野を広く考えを深くし、人間と社会の原点を追求し教養を身につけ、自ら人間として進歩、成長することである。

欧米の文化と日本の文化

文化は先人たちの知恵の集積である。幼児は、家族や周囲の人たちの習慣や前例の中で育つ、すなわち文化を刷りこまれて育つ。したがって、文化は世代が変わってもなかなか変化しない。文化は世代が変わっても変化しないことを考えれば、後世に残すべき文化は、人間と社会の原点を追求した、社会の変化を越えて普遍的な文化でなければならない。

かつての日本のような自然の影響を強く受ける農耕社会は、知恵と工夫で大きく進歩することはない。進歩がない社会の人間の思考力は等閑視されてきた。やがて日本は欧米の文化に接したが、日本人は、日本の文化と対極にある欧米の文化が理解できなかった。そ

こで、日本人は、和魂洋才と言い訳しながら、とりあえず欧米の文化の中で対象が具体的な自然科学だけを習得し、対象が具体的でない人間と社会の原点を追求しなければならない、教養についての考察は先送りし、教養が欠落したまま現在にいたっている。

日本の文化は、原点を追求する文化ではなく、すべてをあるがままに表面的に受け入れる情の文化であり、必ずしも人間と社会の原点の追求を必要としない文学、芸術等に向かった偏った文化である。欧米の文化は、人間と社会の原点を追求した思考的文化であり、宗教、政治、経済、自然科学等を含めあらゆる分野に、原点の追求という共通点がある。その結果、日本の文化と欧米の文化の間には、教養という大きな壁ができた。世界的規模で視野を広くする理由は以上のことを読み取るためである。思考は個々の人間を進歩、成長させる。先人たちの思考と知恵の集積である文化は、社会を進歩、発展させる。

あらゆる分野の中から、工業の基礎である科学技術だけを取り入れたことは、間違いのもとではなかったのだろうか。工業で日本人の先輩である欧米人は、複雑な工業社会の早くて大きい変化に対処するうえでも、日本人の先輩である。原点を追求した政治、経済等は、欧米では社会の秩序と進歩のために有効な手段である。原点を追求せず制度だけを表面的に取り入れた政治、経済等は、日本では社会の秩序と進歩のために有効な手段にならない。

欧米の制度は、原点からの思考と思考をつきあわせ、互いに納得した共感による連帯感を基とした、社会における存在意義を明確に定めた、機能体組織で運営される。思考力不足で自己中心的な人が機能体組織を運営すれば、組織は、表面上機能体であるが、実質共同体になる。本来機能体でなければならない組織が、自己中心的な人の情と情の共感による連帯感を基とした共同体に変質すれば、その組織は、社会における存在意義を見失い迷走する。共同体の集まりである日本の世間は機能体の集まりである本来の社会とは次元が異なる。

太平洋戦争と平成不況を含め、明治維新以後の日本の社会を混迷させた原因は、日本人の教養の欠落である。軍部や官僚が、人間と社会の原点が見えず、最高の価値である教養が見えず、人間の能力の限界が見えず、社会の一部を分担していることを忘れ社会の頂点に達したと錯覚し、社会に通すべき筋とけじめをつけることを知らず、国民を納得させることができず、権力をふりかざす。大きな潜在的力を持つ国家を背景と

する彼等は、自分たちが大きな権力を持ったと錯覚し、社会の秩序と進歩に不可欠な国民の知恵と判断と納得は念頭になく、権力で国家を取り仕切ろうとし独走して大きな失敗をする。小社会に埋没し、金銭、社会的地位で自己満足し教養が見えない国民は、軍部や官僚を批判できず、政治に先を越され彼等の独走を許し、大きな失敗の付けを払わされる。個人の教養の欠落は個人の失敗に終わる。国家的規模の教養の欠落は国家的規模の失敗に終わる。

社会は少数の人では不可能なことを可能にできる大きな潜在的力を持つ。この力が他の社会の否定に向けられたとき、戦争が勃発する。教養が身につけていない人が多い社会は、教養を身につけた人の考えが理解できなくて話が噛み合わず、一部の人が社会の大きな潜在的力を誤用し実力行使に踏みきる心配がある要注意社会である。これが太平洋戦争の反省である。思考を怠って教養が見えず軍部の独走を許した国民も、軍部と同様に戦争の責任を負わなければならない。一国の政治はその形態を問わず国民の意思の反映である。思考力不足による教養の欠落は戦争責任の免罪符にはならない。

日本は、湾岸戦争の際、日本国民のための日本国憲法を盾に、金銭的支援しかしなかった。日本人は金銭的支援に対する欧米諸国からの謝意がないことが理解できなかった。金銭的支援は教養を最高の価値とする欧米人にとって二次的な支援でしかない。日本からの多額の拠出金にもかかわらず、国連の常任理事国に推薦されない理由は、日本人に世界的規模の社会にけじめをつけ筋を通す、教養が身につけていないことである。

日本はかつて工業生産で欧米先進国の工業を圧倒した。失業者が増加した欧米諸国は、たまりかねて日本人の労働時間を欧米人並に減らし、欧米と対等の条件で競争するよう日本に訴えた。これに対し当時の日本は、欧米人は日本人並に労働時間を増やしたらよいと応じた。金銭が最高の価値である日本人は、教養を最高の価値としそのために思索のための時間的ゆとりが欲しい、欧米人の言い分が理解できなかった。日本は、教養の欠落による価値観の相違で、欧米の文化を否定し欧米の信用を失った。

多くの人に被害者意識を与えたジャパンバッシングは、日本一国の経済成長よりも世界的規模の経済秩序を優先させるという、ダブルスタンダードの発想による論理であり、日本経済の一人勝ちに対するねたみの感情ではない。

教養を身につけた人は、相手の言動から、相手に教養が身につけているか否かがわかる。欧米人は、日本人に教養が身につけていないことを見抜いている。教養の欠落はいかに表面を取り繕っても見抜かれる。教養の欠落は日本の社会を混迷させそのうえ欧米の信用を失わせる八方塞の原因である。人間と社会の原点を追求した教養は時代を越え民族を越えた普遍性がある。日本が国際的孤立状態から抜け出し欧米人の信用を回復するためになすべきことは、日本人が教養を身につけること以外に方法がない。

人間と社会の原点を追求し教養を身につけた人は、社会の中の自分を明確にできる、すなわち自我を確立できる。自我を確立できた人は、他人から自由、権利および平等という自分の領域に侵入されたくない。自我を確立できた人は、自分の意思で行動し、成功すれば成功の結果は自分のものであり、失敗すれば自分で責任をとる、すなわち自立する。

人間と社会の原点が追求できず教養が身につけていない人は、社会の中の自分を見失い、自我が確立しない。自我が確立していない人は、他人から金銭や情で、自由、権利および平等という自分の領域に侵入されてもあまり気にしない、金銭、同情や権力で、他人の領域に侵入しても許されると思っている。自他の領域が明確でない人はけじめをつけることを知らない。けじめがない社会では、自我が確立していない人は、周囲の人に倣って行動し、成功すれば成功の結果は皆のものであり皆に分配しなければならず、失敗すれば皆でかばってくれるから責任感はない、すなわち自立しない。

思考力不足で自立できていない自己中心的な人は、自らの知恵と工夫で利益を得ることができず、思いつきの浅知恵で社会から利益の分け前に与ろうとし、経済と社会を混乱させる。経済は人々の欲望を満たすための営みである。内面的な豊かさである教養を身につけた人の自立は、欲望と直結している経済にとって必須の条件である。歴史は、二面性を持つ豊かさのうちの表面的な豊かさにはか注目しない社会は、束の間の繁栄の後、衰亡の道を辿ることを教える。

参考文献

- 阿部謹也(1997) 教養とは何か 講談社現代新書
- 鷲田小彌太(1997) 欲望の哲学 講談社
- 源 了圓(1999 復刻版) 義理と人情 中公新書
- 加藤秀俊(1966) 人間関係 中公新書
- 西村貞二(1966) 教養としての世界史 講談社現代新書
- 長谷川三千子(2001) 民主主義とは何なのか 文春新書

鹿嶋春平太（1994）聖書の論理が世界を動かす 新潮選書
渡部昇一（1987）アングロサクソンと日本人 新潮選書
小泉信三（1966）福沢諭吉 岩波新書
佐藤淑子（2001）イギリスのいい子日本のいい子 中公新書

中山 治（2001）戦略思考ができない日本人 ちくま新書
西尾幹二（1969）ヨーロッパの個人主義 講談社現代新書
堺屋太一（1999）組織の盛衰 PHP 文庫
中西輝政（1998）なぜ国家は衰亡するのか